

国際会議の開催状況比較： 2021年と2022年を比較して

次郎丸 沢†

†株式会社カンファレンスサービス

キーワード：国際会議，開催状況，比較，ACM

1 はじめに

COVID-19の流行により，2020年は学会を対面で行った学会は2020年4月に行った日本感染症学会[1]など数える程度しかない．学会の開催状況について正確な統計を取ってはいないが，2020年に開催予定であった学会の多くは中止もしくは第5回国際ICT利用研究学会全国大会（以下，本会議と表記）と同様にオンラインでの開催となった．また，弊社が担当した2020年の学会はすべてオンラインでの開催となった．

2021年はVirtualの会議と対面方式の会議を同時進行で行う，いわゆるハイブリッド形式の国際会議が増えてきたが，2022年についてはどのようなになっているのかについて，国際会議の開催状況を比較することで現状を明らかにする．

2 ハイブリッド形式での学会開催

本稿では詳しい説明を省くが，ハイブリッド形式での学会開催の場合、ハイブリッド形式を行うための機材や人員配置のためにコストがアップする一方で，Virtual形式で参加する方に提供する施設利用料や飲食費に関するコストはダウンする．

総合的なコストが上がるか下がるかは，ハイブリッド形式にかかるコストや施設利用料や飲食費の多寡で変わってくるので一概に断言することは出来ない．

3 調査方法

本稿ではACM (Association for Computing Machinery) のCalendar of Eventsを使用した[2]．そこで以下の条件に合致する国際会議(Workshopを含む)を抽出した．

- 開始日が2022年3月1日～2022年4月30日まで
- 参加費がウェブサイト等から確認できる
- 同系列の会議は1種類とカウント

ここで，同系列の会議は「ウェブサイトのレイアウトが全く同じで，かつ参加費が全く同じ会議を同系列の会議」と定義した．

なお，参加費の種類は①著者(Author)、発表者(Presenter)、聴講者(Listener)の3種類を抽出した．著者(Author)とは発表論文を掲載して発表をする者、発表者(Presenter)とは発表論文を掲載しない、もしくはAbstractのみ掲載して発表をする者、聴講者(Listener)とは発表をせずに参加をする者のことである．

また，参加区分は募集時期が複数設定している場合は最も早い時期の金額を使用し，参加者区分は学術系で最も高い金額を抽出した．例えば，国際会議ICCEEG2021の参加費にはEarly BirdとRegularの2区分が設定されているが，Early Birdの方が他のDivisionに比べて募集時期が早いためEarly Birdの参加費を抽出し，さらに参加費の区分としてRegularとStudentsの2区分が設定されているが，Regularのほうが高額であるため，Regularの料金を抽出する[3]．

筆者は同様の調査を2021にも行っており[4]，本稿では今年との比較を行う．

4 結果と考察

4.1 会議形式別会議開催数

調査した結果，2021年3月から4月にかけて（以下，2021年と表記）は合計106の国際会議および国際workshop（以下，国際会議等と表記）の

データを得ることが出来た一方で、2022年3月から4月（以下、2022年と表記）では27の国際会議等しか確認できなかった。国際会議などの開催数は2021年のデータを基準とすると、2022年は74.5%減と大幅に落ち込んでいる。

会議形式別開催数とその割合について、2021年のデータを表1に、2022年のデータを表2に示す。2021年ではHybrid会議が過半数を占めていたが、2022年ではVirtualの会議が過半数を占めている。

表1 会議形式別開催数と割合（2021年）

	開催数	割合
Hybrid	63	59.4%
Virtual	36	34.0%
In-Person	7	6.6%
合計	106	100.0%

表2 会議形式別開催数と割合（2022年）

	開催数	割合
Hybrid	9	33.3%
Virtual	14	51.9%
In-Person	4	14.8%
合計	27	100.0%

会議形式別参加費種別数の割合について、2021年のデータを表3に、2022年のデータを表4に示す。

表3 会議形式別参加費種別数割合

	1種類	2種類	3種類
Hybrid	0.0%	9.5%	90.5%
Virtual	63.9%	25.0%	11.1%
対面	14.3%	42.9%	42.9%
合計	0.0%	9.5%	90.5%

表4 会議形式別参加費種別数割合

	1種類	2種類	3種類
Hybrid	100.0%	0.0%	0.0%
Virtual	57.1%	42.9%	0.0%
対面	75.0%	25.0%	0.0%
合計	74.1%	25.9%	0.0%

2021年では開催形式によって参加費の種別に差があったが、2022年では参加費の種別が1種類の場合がどの開催形式でも過半数を占めた。

5 考察およびまとめ

考察およびまとめは発表時に行う事とする。

参考文献

- [1] 第94回日本感染症学会総会・学術講演会, <https://www.societyinfo.jp/jaid2020/> (2020年11月10日閲覧)
- [2] ACM, “Calendar of Event”, <https://www.acm.org/calendar>, (2022年3月13日閲覧)
- [3] Registration Instruction, ICEEG 2021, <http://www.iceeg.org/reg.html> (2021年3月15日閲覧)
- [4] 次郎丸 沢, “ハイブリッド形式の国際会議における参加費の設定に関する一考察”, 国際ICT利用研究研究会講演論文集第9回, pp55-58, 2021